

平成 24 年度関東学園大学プロジェクト型授業報告書

「アカデミック・カフェの実践：
太田市におけるオープンな知的交流
の会」

Univ. kanto-gakuen



2013

目次

はじめに	2
1 プロジェクト選定理由と目的	2
2 実施カフェの記録	3
3 今年の成果と課題	4
文献リスト	9
担当教員による講評	9
註	10

付録資料：プロジェクト申請書、中間発表並びに成果発表会資料、チラシ、新聞切り抜き

・担当教員 伊藤栄晃（関東学園大学教授）

・参加学生学籍番号・氏名

21111032 島田雄貴	21011019 内田恭平
21111054 丸山裕太	21011055 角田拓巳
21111065 和田 実	21011052 堤 洸希
21111002 石原正典	21011067 松村 豪
21111056 三田真隆	21011004 新井健太
21111051 藤井崇之	21011024 金井延介
21111042 多田和弘	21011073 山口健太
21111063 四家隆裕	21011051 齋藤業輝
21111030 肖 遥	
	20911014 神戸将志
	20911037 福田俊大
	20911041 矢島慎平

はじめに

「アカデミック・カフェ」とは、大学の学生・教員がキャンパスを離れ、街中で一般市民を巻き込んで、自由な雰囲気の中で飲み物を手に知的議論を楽しむイベントである。この種のイベントは、1992年にフランスの在野の哲学者マルク・ソーテが、パリの街中で始めた「哲学カフェ」が源流といわれているⁱ。当時彼はそれを「ソクラテスのカフェ」と呼んだ。それは、ギリシャ哲学の祖ソクラテスが、街中で人々に鋭い質問を投げかけ、常識というものが如何に危うくいい加減なものであるかを、実感させた故事にちなむ。

わが国でも、最近、東京周辺・京阪神地区、それに北九州など各地で、多彩な「カフェ」が開かれている。「哲学カフェ」はもちろん、理工系の研究者・学生が主催する「サイエンスカフェ」なども広まっているⁱⁱ。いずれも大学と地域が連携して、市民には最新の学術情報・知識の最前線を分かり易く紹介し、同時に学生には、教室では得られない市民との意見交流と実社会の知恵に触れる機会が与えられ、相互に良い刺激を与え合っている。しかし群馬県では、この種のカフェ・イベントの試みは未だ広まっていない。

伊藤ゼミ（演習Ⅰ・Ⅱ、ソフォモアセミナー）では、昨年度「プロジェクト型授業」の一環として、このイベントを地元太田市で試みた。幸い市内の喫茶のできるお店3店よりご理解とご協力をいただき、実施することができた。3店とは、市内東本町の「カフェ・ド・セラ」、同じく東本町の「JAZZ&CIOFFEE 'N'」、そして市内矢島町の「Guitar Research Wood Stock」の3店であるⁱⁱⁱ。

これまで「カフェ」の多くは、東京や大阪・京都といった大都会で行われており、多くの人々が絶えず行き交うという条件の下で、一期一会の知的交流を楽しむという、このイベントのコンセプトは、太田では満たされないこと明らかで、本当にできるものか、全然わからなかった。なにからなにまですべて手さぐりで、いろいろ不手際し放題ではあったが、各お店の皆様とそこの居合わせた市民の皆様の温かい励ましにより、予想外に面白いイベントとして実施できた。それもあって、幸い地元紙「上毛新聞」にも、2011年11月28日の24面で、紹介いただいた。

3店の店長さんそれぞれからも、イベント終了時にはお褒めの言葉をいただき、またやって欲しいとの強いご希望だった。そこで、先輩たちの築いた土台に立ち、さらに今年もっと充実した「カフェ」実施をと思って、取り組んだ。以下今年の「カフェ」の成果と反省点とをまとめる。

1 プロジェクト選定理由と目的

カフェ・イベントを選んだ理由は、二つある。一つは地域に根差した大学を目指す関東学園としては、地域の人々に知的情報や知識を提供する活動は重要だと考えたこと。もう一つは、大人の市民の皆さんとざっくばらんなお話し合いをし、実社会の知恵を吸収しよう

ということである。知識・情報の提供なのだから、ずいぶんと事前に勉強しなければならない。

そしてその最終目標はもちろん、我々もそれぞれのお店の人もお客さんも、皆地域に生きる仲間として、ともに知恵を出し合って支え合うことにある。そうだから目的は、お店の人とお客さんとも、とにかくよく話すことに尽きると思う。

2 実施カフェの記録

今年は、合わせて11回のカフェを実施することができた。そのデータをまず紹介する。順に回数、カフェの種類、日時、場所、テーマを示す。

第1回 学術カフェ 2012年6月12日 カフェ・ド・セラ 伊藤栄晃「市場経済と共同農業とのコラボレーション」

第2回 書評カフェ 2012年6月18日 カフェ・ド・セラ 近藤麻理恵『人生がときめく片付けの魔法』(2011) & 橋下徹・堺屋太一『体制維新一大阪都』(2011)

第3回 学術カフェ 2012年6月19日 Wood Stock 伊藤栄晃「市場経済と共同農業とのコラボレーション」

第4回 学術カフェ 2012年6月21日 JAZZ&COFFEE ‘N’ 伊藤栄晃「市場経済と共同農業とのコラボレーション」

第5回 書評カフェ 2012年7月23日 カフェ・ド・セラ 瀧本哲史『僕は君たちに武器を配りたい』(2011)

第6回 映画カフェ 2012年7月24日 Wood Stock “Upside Down” (イギリス作品、2010)

第7回 書評カフェ 2012年7月31日 カフェ・ド・セラ 木暮太一『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか』(2012)

第8回 書評カフェ 2012年10月22日 カフェ・ド・セラ 櫻井よしこ他『日中韓歴史大論争』(2010)

第9回 書評カフェ 2012年10月25日 カフェ・ド・セラ 櫻井よしこ他『日中韓歴史大論争』(2010)

第10回 映画カフェ 2012年12月17日 Woodstock 『ONCE ダブリンの街角で』(アイルランド作品、2006年)

3 今年の成果と課題

各回の「カフェ」の成果と課題について、我々の率直な感想をまとめる。

① (6/12&6/19・21) 学術カフェ：伊藤栄晃「市場経済と共同農業とのコラボレーション」

良かった点

6/19はお客さんも参加してくれ、実際に先生が国際学会の報告で配った資料を使って説明を行い、お客さんに分かりやすく伝えることができた。高校の教科書と当時の文献の比較だったので分かりやすかった。お客さんも面白がってくれたみたいだった。これらの回は、書評カフェというより授業に近い感じだったので、カフェというオシャレなところで授業をするのは、リラックスできて、とても新鮮でいい経験ができました。

悪かった点

内容が少し難しかった。ヨーロッパの西洋の昔の田舎のハナシだったし。もっと、学会場所のグラスゴウとかの話ができればよかったと思う。また今年度最初ということで、始まりや進行に多少の遅れが生じたし、学生たちの個人的な発言が少なかった。

② 6/18(月) 書評カフェ ㊦ 近藤麻理恵『人生がときめく片付けの魔法』(2011) & ㊧

橋下徹・堺屋太一『体制維新—大阪都』(2011)

㊦ 良い点

近藤麻理恵の本では、片付けの極意が示され、例えば、一気に片付けるとリバウンドするという話もあり面白かった。それは、一気の片づけは、実は中途半端に整理・整頓・収納しただけなので、いざ整理したものを使ってみようとんでも余りうまくいかないという。内容で重要な部分は太字になっているなど、工夫があちこちにみられ、ポイントがつかみやすく分かりやすかったし、ためになる話も多かった。

悪かった点

しかし何のためにこの本を、カフェで議論しなければならなかったのか、未だに謎だ。

㊧ 良い点

橋下徹たちの『体制維新』は、よく読み込んできたつもりだったが、実際内容が

結構難しかったから、自分が発表する段階になったら、あまりうまくいかなかったのでもちよっとうろたえた。でも事前準備で、ずいぶん知らないことを勉強した。当時タイムリーなネタだったし、橋下は好きな有名人なので、ですごく関心もてた。

悪かった点

結果的には賛成と否定で討論して、どちらが正しいかは分からずに終わった。政治は本当に微妙な世界だと感じた。やっぱり勉強が足りない。

これらの本については、普段まったく興味がなく一人では読まないけど、今回の書評カフェを通じて読むことができて、とても良かった。そして、今年初の書評カフェだけど、よくできたと思う。

③ 7/23 (月) 書評カフェ 瀧本哲史『僕は君たちに武器を配りたい』(2011)

良かった点

この本は自分たちが就職活動を乗り越えていくため、あるいは若者がこれからの日本社会を生き抜くためのことが、いろいろと書いてあった。この本は今まさに自分たちが読むべき本だと思ったので、この本で書評カフェをすることができたのは、とても良かった。自分たちの考えだけでなく、交流する人たちの意見も大事だと感じた。

悪かった点

ただ準備する段階で、読みが浅かったため、あまり討論にならず市民の皆さんの僕たちへのお説教の場になり、最後は、お店のマスターの話がメインになってしまった。これは良くなかった。やはり、自分たちの意見を堂々と言えるようにしてから、カフェに臨みたい。

④ (7/24) 映画カフェ: "Upside Down" (イギリス作品、2010年)

良かった点

酒とドラッグにおぼれた、ロックミュージシャン達の物語が印象的だった。イギリスの音楽の、何か訳わからないけれど、ものすごいエネルギーを感じた。ただ残念ながら、今回はお客さんがあまり入っていなかった。お店はとてもいい雰囲気、女性のオーナーが参加してくれ、リラックスしたムードだった。全体的にしっかりと自分たちの間で話ができ、今までのように本だけではなく、DVDで映像も見られるというのは、新しいカフェの試みだったし、映像を使ったから、みんなが参加できてとてもよかった。

悪かった点

お客さんが入ってなかったから少し寂しかった。お店のオーナーが、軽音楽が趣味で、話に積極的に加わってくれたので、助かった。ちょっと場所的にも時間帯的にも、

(夕方の西矢島町)お客さんの入りは、あんまり期待できないかも。DVDの内容的には、ドラッグの話題が結構出てきて、この作品を選んだ先生の趣味が、よく分からない。こういうことについてきちんとした考えを持っていない人には、この作品は、見方によっては怖いかも。

⑤ (7/31) 書評カフェ：木暮太一『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか』(2012)

良かった点

どういった「働き方」をすれば幸せに暮らしていけるのかが、とても薄いページの本の中にうまくまとめられていて、よく理解をすることができた。「働き方」によってしんどくなるし、楽になるものなのだとも思った。参加学生が就活性ということもあり、参考になるテーマだった。また、お客さんの中に新聞記者の方が来て下さっていたので、我々の宣伝にもなったし、お客さんからも活発な意見をいただいた。

悪かった点

参加した学生数が全部で3人しかなかった。大学の授業と重なってしまい、自分も含め多くのメンバーが、貴重な機会をみすみす逃してしまったのが悔しい。参加した学生から聞くと、お客さんたちや途中で参加して下さったお店のオーナーは、要するに若いうちは辛抱に辛抱を重ねて腕に磨きをかけなきゃいかんというお話だったようだ。しかし、その点については、職自体を見つけるのが大変で頑張ろうにも頑張れない人も多いという現実と少しズレてると思った。参加した3人は、情けないことに反論できなかったという。

⑥ 10/22 (月) 書評カフェ 櫻井よしこ他『日中韓歴史大論争』(2010) (ソフォモアセミナー・セクション)

良かった点

中国との尖閣問題や、韓国との竹島問題が騒がれる中で扱った作品だったので、最も世相を反映したカフェになった。中国からの留学生がカフェに同席してくれていたのも、市民の方々との意見は大変面白く、日中関係を考える上で、とても参考になった。この日は参加していただいた人数が多く、日本側と中国側それぞれの立場から、深く色々な話し合いができた。人間の根源の話をする人もいれば、留学生に「共産党」のことを聞いたり、幅広い討論内容だった

悪かった点

全然なかったです。とても面白く有意義なカフェだったと思う。

⑦ (10/25) 書評カフェ：櫻井よしこ他「日中韓歴史大論争」(演習Ⅰ・Ⅱセクション)

良かった点

当時ニュースにもなっていたことだったので、お客さんも分かりやすかったし、話題として意見を言いやすいテーマだった。また、お客さんの食付きが良くいろいろな会話を

まで発展していった。中国・韓国についての身近な話から、日本のはなしまで、いろいろ自由に話せて、とても気分良かった。なんだか、回数を重ねるごとに良くなっているのを感じる。とてもよかった。

悪かった点

予習が足りなくて、歴史的背景も含まれているのだから、事前にしっかり知っておく必要があった。まだまだ勉強足りないと思った。大事なことからもっと勉強したい。また、途中から話が少しずれてしまった。司会進行の腕がまだまだだった。

⑧ 12/17 映画カフェ『Once "ダブリンの街角で"』(2006)

良かった点

アカデミー賞の歌曲賞を受賞した作品だったので、とにかく音楽はとても良かった。ストーリーは、正直言って月並みのラブストーリーだった。またストーリーにいくつか矛盾があったことが、少し気になった。カフェで映画を見たのは今回が初めてだったので、とても斬新だった。また、カフェの雰囲気にとっても合っていて、とても有意義な時間だった。お客さんが一人、この会を楽しみにわざわざここへ来て下さった。音楽にとっても詳しい人で、自分は知らなかった作品だったし、音楽も斬新だったので、実に楽しかったと言っていた。

悪かった点

どうもイマイチ音楽に乗れないというメンバーが何人かいた。これは趣味の問題だから、しょうがないのだけれど。

今年度の企画全般の改善点（課題）

みんなが知っていてなじみやすいテーマを企画するうえで、もう少し用意が必要だった。大学での説明会とかぶったりするので、できれば説明会などがない日を選ばなければならない。

全体的に読みが浅く、話の内容を理解している人と、理解していない人の、差があった。全体を通して、普段あまり読まない本を読むことができるのは、とても良かった。あと、全体的に話がそれてしまうことがあったので、司会役はきちんと対応しなければならない。それと、残念だけど、カフェに参加しても、まだまだ自分の意見をあまり言えなかった。

今年度の広報上の課題

チラシのデザインの改善が必要。また大学内にもチラシその他で、更に広めたい。去年はチラシを見て、関学の学生が現地まで来てくれてカフェに参加してくれたこともあったというけれど、今年はそれがなかった。そのためにHPを作成したりするのもいいかも。ただいったい誰がやるのだろうか？ そして今話題の題材を、いつもアンテナを張って、しっか

りとタイミングよくつかむこと。

来年度カフェの新企画案

カフェの形式について

- ・ディベート形式を取り入れる
- ・違うお店でやる
- ・食事をしながら発表する
- ・先生が、質問どう思っているかを投げかけてみる
- ・今年や去年のニュースについてやる

新企画について

- ・本じゃなくて、新聞とかです。一つのニュースでやったり、みんながそれぞれ気になっているニュースを、議題にしたりする。
- ・いろいろなジャンルの本や映画をする。
- ・映画作品に関するカフェを、もっともっとやる。

特別参加 : 廣瀬将太 (21011062) のひとりごと

- ① 普段自分では絶対に読まないような本を読んだりしてとてもいい経験になった。本を読んでその中に今の自分にとってもとても役に立つ内容の物もあってすごくためになって良かった。一般の人達と意見を交わして話し合ったりして交流を深めることができたのも良かった。「アカデミック・カフェ」を行う場所もとてもゆったりした雰囲気のカフェでお茶しながら行うことができたのはとてもリラックスして行うことができて良かった。今回のように一般の人と交流を深めることができることはあまりないことなので「アカデミック・カフェ」のような企画はとてもいいことだと思う。
- ② 今年のカフェは準備をする時間がとても少なくて内容をあまり理解しないで始めることが多かった。そのためカフェの本番で自分の意見をあまり言えなかったし自分の意見をあまり言わずに終わってしまう人が自分以外にもいた。また、カフェを開始する時間と終る時間が遅かった。そのため準備をする時間をもっと多くする必要があるしなるべくもう少し早い時間に開始できるといいなと思った。
- ③ ・カフェで映画を題材にする機会をもっと多くする。
・他の人の意見にもあったように新聞のニュースを題材に意見し合うのもいいと思う。

*廣瀬君は、カフェ・メンバーには登録されていなかったが、自主的にカフェには参加していたので、敢えて意見を求めた。

文献リスト

著作

橋下徹・堺屋太一『体制維新—大阪都』(文芸春秋社、2011年)

瀧本哲史『僕は君たちに武器を配りたい』(講談社、2011年)

木暮太一『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか?』(星海社、2012年)

櫻井よしこ他『日中韓歴史大論争』(文芸春秋社、2012年)

小林よしのり他『AKB48 白熱論争』(幻冬社、2012年)

DVD 作品

ドキュメンタリー『UPSIDE DOWN』(イギリス作品、2010年)

映画『ONCE ダブリンの街角で』(アイルランド作品、2006年)

*担当教員による講評

「はじめに」でも記されているように、昨年の「カフェ」は、まったくの手さぐり状態だったので、かなり私自身が企画やお店との交渉全般を担った。キャンパスを離れての現実社会と直接触れ合うイベントということもあり、余り大きな失敗・不手際は当人たちの将来や大学の名誉にもかかわる局面も考えられるため、当初はある程度はそれも仕方のないことであった。

そこで今年度は、少しずつ企画の裁量を学生たちに下して、自主的な運営の方向を目指した。書評で取り上げる話題の図書を選定や、カフェの現場での司会進行など、いくつか学生自身の運営という点で進展した面があった。お店との日程調整などは、臨機応変な対応と参加メンバーとの密な連絡が必要なので、今年度も未だ私が行ったが、今後はそれも学生の運営に任せてみようと思う。

本学の学生全般に言えることだが、大人しく、積極的な発言を避けようとする傾向があることが、前々から気になっていた。これは年々厳しさを増す就職活動において、決してプラスにはならない。このことも、「カフェ」などという都会風のイベントを敢えて太田で実施してみようと思った理由の一つだった。

いざ喫茶店に乗り込んでも、実際なかなか見も知らずの大人の市民と会話するのは、難しい。そこでカフェの会場に皆で到着すると、まず学生たちに、その場に居合わせ、コーヒーや軽食を楽しんでいるお客に、いきなり飛び込みの勧誘をしてくるように指示する。さすがに皆なかなかもじもじしてできないものだが、そのうち意を決した何人かは話をすることに成功し、ほぼ毎回、市民の参加者を得ることができたのだった。

議論に入っても、学生たちは、初めは市民の「常識」的な話を黙って拝聴する一方だったが、やがて一人二人と、少しずつ自分の言葉で自分の考えを述べ始めるようになる。この展開が実に印象的だった。ただ相手の言うままに流されるのではなく、逆に全く聞く耳を持たずに反抗するのもなく、それなりの根拠と理由をもって、たどたどしくはあるが自分というものを打ち出そうとする姿は、感動的ですからある。やはりこのイベントの教育的な効果は、明らかなように思われる。

今一つ付け加えなければならないのは、この太田市には、予想外に多くの文化を理解し愛する人々が住んでいるという事実である。外部からの印象としては、北関東の殺伐とした工業町で、文化の香りなど無縁の地のように思われがちなこの町は、実に豊かな文化的水脈を有しており、そのことの価値を十分に自覚し、地域で育ててゆかなければならない。本学とわがゼミの「カフェ」がその一助となれば、誠に望外の幸せである。

ⁱ ウィキペディア「哲学カフェ」参照。

ⁱⁱ ウィキペディア「サイエンスカフェ」参照。

ⁱⁱⁱ 詳しくは平成 23 年度プロジェクト型授業報告書「アカデミック・カフェの実践―市民参加の『書評カフェ』の組織」を参照せよ。